The Japan Society of Educational Sociology

松原の「教育コミュニティ」づくりにかかわる

大橋　保明（大阪大学大学院）

1．はじめに

昨年のインプレッシヴな課題研究を引き継ぎ、本年度は次のような主旨で課題研究が設定された。「さらに組織的で当事者主導の事例を取り上げ、「学校をつくる」もうひとつの側面に光をあてる。大阪府松原市。これまで多くの研究者が関心を寄せかかわってきたフィールドのひとつである。研究者と実践者がかの地の生活世界の内と外を生きる中で自己変容する姿を当事者の言葉で紡いでいく。今回は、「学力論争」「地域と学校の連携」などの主要な教育改革言説との異同と浅深を見定めながら、「教育社会学に何ができ何ができていないか」を問うてみたい。」

関西圏の研究者や解放教育（同和教育）研究者以外に松原市の教育活動がどれだけ認知されているかはわからないが、参考資料・文献リストからもわかるように、これまで多くの実践者が情報を発信し、また多くの研究者が教育活動にかかわってきた地域であるといえるだろう。報告者のかかわりは、昨年の清水氏同様、「学校をつくる」ことを第一義的な目的としていたのではなく、「中学生がよくあいさつしてくれる」「地域住民の関わりが多い」といったちょっとした気づきから、その背景を探ってみようとそこに吸い寄せられたといった感じのものであり、結果として学校をつくる営みに寄与したのかもしれないといった程度のものである。しかし、そのかかわりのなかで、研究者の実践へのかかわり方、実践にかかわるということはどういうことかについて自問自答を繰り返していたのは確かである。そこで本報告では、「教育社会学に何ができ何ができていないか」という問いを解く材料として、松原市立第五中学校区における教育コミュニティづくりの取り組みとそこにかかわった報告者の葛藤・自己変容について描いてみたい。

2．調査研究活動の経過

報告者の教育コミュニティづくりに関する調査研究活動は、池田寛氏を研究代表とする「教育コミュニティ研究会」が発足した2000年度に始まる。研究会では、松原市内の4つの中学校区を選定し、学校園の教育活動だけでなく、地域の諸活動についても積極的に参与観察を行ってきた。その調査研究の成果は、大阪大学大学院人間科学研究科池田寛研究室（2001）『協働の教育による学校・地域の再生―大阪府松原市の4つの中学校区から』（報告書）にまとめられている。本報告は、そこに所収されている大橋・濱田「松原第五中学校区」で得られた知見をもとに行われるものである。

①松原市の「教育コミュニティ」づくり

「教育を通じて人々のつながりが生まれ、ネットワークがつくられていく地域のことであり、そのような地域づくりをめざした活動でもある」（池田 2000）とされる「教育コミュニティ」づくりが教育行政施策として取り組まれたのは 2000 年度からである。大阪府下（大阪市除く）全 334 中学校区で、連絡調整・地域教育活動の活性化・学校教育活動への支援協力といった機能を有する「地域教育協議会」の設置が進められ、松原市では全 7 中学校区が初年度から組織を立ち上げ活動を展開している。

松原市の教育コミュニティづくりの源流は、1994 年度からの「マイスクール研究推進事業」であり、学校と地域住民とがかかわる機会を作り出してきた。また、昨年度立ち上げられた市単位の地域教育協議会「松原市地域教育協議会」は府内唯一であり、7 つの中学校区の連携・協力が図られている。こうした松原市における教育コミュニティづくりには、市全体で教育活動を盛り上げていこうとする姿勢が見られ、その背後には「支援する教育委員会」（菊地 2000）の存在が認められる。

②松原第五中学校区における取り組み

市教委の「マイスクール研究推進事業」（1994 年度～天美西小、1998 年度～天美小、2002 年度～五中）を契機に、「グランドワー

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

ク」や「天美っ子タイム」などの授業を通じて学校と地域とのかかわりが多くなり、その過程において、地域が主体となって始まった学校週5日制事業の「寒餅つき大会」(1995年)や天美西小 PTA や地域の人々がスポーツなどを企画する「おやゆびとまれ」など、学校と地域とが協働しなければ成立しない取り組みが増え始めた。寒餅つき大会のネットワークをベースにして1997年から始まった「いきいき環境フェスタ」はまさにその象徴である。フェスタの実行委員会をベースに1999年9月には大阪府下のどこよりも早く「五中校区地域協議会」が当事者主導で立ち上げられ、積極的な地域教育活動が展開されている。報告当日は、時間の許す範囲でフェスタに向けた共同制作の場面を紹介し、当事者間の関係変容の一端を示したい。

3．当事者とのやり取りの中での自己変容

①生き方のぶつかり合い

「必要とされていない者が必要とされた瞬間に「いかに語ることができるか」は、カリスマ性のない研究者が、学校文化の変革に一歩踏み出せるかどうかの境目であろう」(清水2002) との指摘に賛同するフィールドワーカーは少なくないだろう。報告者なりに解釈すれば、偶発的におとずれる語りのチャンスをものにするということだろう。当事者との関係が変化してきたことを報告者が実感できたのも、調査研究活動の経緯を自分自身の人生とからめて数人に語るチャンスを得てからである。その語りは砂漠に水がしみ込むがごとく周囲へと広がり、それまで感じていた緊張から解き放たれ、それ以降、まさに活動に「かかわる」ことができるようになったと実感する。同時に、当事者たちが繰り返し語る言葉の中にそれぞれの人生観が織り込まれていることに気づき始めたのもこの頃からであった。

②実践の相対化

松原市には教師にも地域住民にも良い意味での競い合いがある。ひとつは校区内の学校と地域との内側の競い合いであり、もうひとつは他校区（他地域）との外側の競い合いである。報告者は大学院生という立場にあり、どちらかといえば「ボランティア」型（志水2003）のかかわりであったが、この競い合いの伝統のなかで「インフォーマント」型のかかわりも強く求められた。「内側」では学校―地域間のつなぎ役として、また「外側」では他校区がどのような取り組みをしているかだけでなく、外から見てその取り組みの意味はどこに見出せるのかについて意見を求められることもあった。このタイミングも同様に、いつやってくるかわからない。そのため、実践とのかかわりにおいては常に自分の考えを整理し、それを頻繁に書き換えながら取り組んでいった。しかし、こうした実践の相対化や全体への視点を個人で達成していくには限界がある。その点で、2人組でフィールドワークを行い、共同で松原市のエスノグラフィーを描いたことは、校区を超えた対象把握や情報収集に有益であった。

4．小括

五中校区では、報告書が発刊されるよりも早く、そのゲラを参考にして新しい取り組み（夜桜を楽しむ会、夏の夜を楽しむ会など）がスタートし、これら協働的な取り組みは全体として肯定的に受け止められているようである。その一方で、協働的な取り組みの推進と子どもたちの状況との乖離から、当事者のなかには無力感にさいなまれている者もいるようである。教育コミュニティづくりにゴールがないことを考えれば、そのプロセスは必然なのかもしれない。報告者自身、自らの生き方に五中校区とのかかわりを刻み込んでいる以上、そのことに無関心ではいられない。研究者の実践へのかかわりを考えたとき、一人の研究者が複数のフィールドに同時にかかわることは不可能であり、一つのフィールドに永久的にかかわることもまた難しいかもしれない。しかし、一度かかわったコミュニティ（「他者の生き方と出会う場」(池田2000)）に関心を持ち続け、それを示す言葉を贈り続けること（渥美2001）は可能であり、今後も続けていきたい。

5．参考文献および資料

・大阪大学大学院人間科学研究科池田寛研究室（2001）『協働の教育による学校・地域の再生―大阪府松原市の4つの中学校区から』

・近藤邦夫・志水宏吉編（2002）『学校臨床学への招待』嵯峨野書院

（詳細なレジュメ・参考文献は当日配布予定）

NII-Electronic Library Service